

「もう斬るのは止めた」

弥一郎は、傍らに立っている楠の梢に

視線を移しながら言った。そのとき、目の片隅

に疾風のように迫りくる男の影を認めた。次の

瞬間、刃が日射しを断ち切るように襲ってき

た。弥一郎はかろうじて抜き合わせ、一撃目を

かわしたが、二撃目を受けきれず、肩先を斬ら

れた。傷はかなり深いと思われた。生温かいも

のが、衣服の中で脇腹を伝って流れ落ちた。次

の攻撃で太腿をえぐられた。四撃目が来る前

に、ようようの体で墓石の後ろに飛び込み、激

しく息をつきながら初めて襲撃者の顔を見た。

黒布で覆ってはいるが、その鋭い目に覚えが

あった。弥一郎に仕事を依頼した遠藤右近の目

である。関良助の安否が気になった。目を凝ら

すと、向こうで、佐島新八らしい男ともう一人

の見知らぬ瘦身の武士を相手に闘っていた。そ

のすぐ右手に、引き返してきたらしい老僕が

斜面を転がり落ちるように下っていく姿が、

木立ちの合間にかいま見えた。

た。真っ向から敵の刀が落ちてきた。岩をも砕

く勢いである。

弥一郎は、墓石に身を当てて反転し、敵の

懐をかいくぐって脇をすり抜けざまに斜めに

斬り上げた。遠藤が上体をそらしてかわそうと

した。だが、剣の勢いは強く、弥一郎の手に確

かな手応えがあった。遠藤の身体が体勢を崩

し、大きく傾いたあと地に落ちて、鈍い音をた

てた。

振り向くと、関の刃を受けたのか、大柄な

分からなかったけれど、なぜか、あの男を死な

せるわけにはいかぬ、と強く思った。弥一郎は

墓の後ろから飛び出ようとした。

「動くな。動けばおはんの命もらいもす。

ておれば、金は返さあでんよか」

そう言っつて覆面の下で笑った。それが弥一郎

の自尊心を痛く傷つけた。大きく息を吸い込む

や、憤然と墓石の影から身体を丸めて躍り出

佐島が背を反らしてゆつくりと倒れるところだつた。しかし、その関も手傷を負っているのか、動きが鈍くなっている。瘦せぎすの武士の俊敏な剣に追い立てられている様子で、倒されるのも刻の問題であるように見えた。

〈助けなくては〉

そう思つて、近づこうとしたとき、先ほど斬られた肩先に激烈な痛みを覚えた。弥一郎は、それに耐えながら、関と闘っている瘦せた武士の背に渾身の気合いを投げた。一瞬攻めていた

になつていた。心の臓が動くたびに、骨までが軋んだ音を立てているようである。

そのとき、十数間先の樹林の中から、両刀を腰に落とし、顔を黒布で覆った男たちが数人ばらばらと躍り出てきて、あつと言う間に弥一郎と関良助を取り囲んだ。どの男たちも目付きが異様に鋭い。既に鯉口を切り、親指を鏢にあてがっている。頭目らしいひとときわ目付きの鋭い男が、声をかけてきた。

「関良助ちゆう男はおまえか」

剣の動きが止まった。その途端、関の剣が猛然と反撃に出た。遠藤に劣らぬ凄まじい太刀筋である。武士は幾度かそれを防いだが、たちまち体勢を崩し、関の刃に胸を刺し貫かれた。だが、さすがに関は疲れたと見えて、その後地面に四肢をつき、肩を激しく上下させている。

「大事ないか」

弥一郎が声をかけると、ええ、と言う声が荒い息遣いととも聞こえてきた。弥一郎は胸を撫で下ろした。肩先の痛みは耐えられないほど

薩摩訛りである。

〈此奴らは関の面体を知らぬらしい〉

そう思つた。だが、いずれにせよ遠藤らを斬つた以上、どちらが関でも無事にすむわけがない。弥一郎は死を覚悟した。つい先刻の激しい命の遣り取りと手傷で、思つた以上に体力を奪われている。だが、まだ一人、二人なら道連れにできよう。そう思つた。

「もういっど尋ねう。おまいが薩摩を売つた

関良助か。関だけに用がある」

「私が関です」

関が向こうで立ちあがり、一歩前に進んで言った。

慌てて敵の動きに目を凝らそうとしたとき、弥一郎は、背後に言いようのない殺気を感じて振り向いた。倒したはずの遠藤が、いつのまにか身を起し、弥一郎に覆い被さるように剣を叩きつけて来たのである。かろうじてかわした。

目を剥いて、新手の仲間に何かを叫ぼうとする遠藤の口を手のひらで塞ぎ、脇差を抜いて下腹をめぐり、覆い被さるように地に倒れた。そのまま動かない。二人の身体が朱に染まり、見るまに血溜まりが広がってゆく。

「事切れたかと思われませんが」

屈強そうな男が言った。

「念のため。関に止めを刺せ」

頭目の男が、手先の一人に目配せした。命じ

いやかわしたつもりだったが、身体が思うように動かず、背中を深くえぐられた。焼けひばしを叩きつけられたような感触が走り、弥一郎は不覚にも刀を取り落とした。かろうじて、遠藤の身体に抱きつくようにして第二刃を防いだ。これが自分の最後だと思ったとき、無意識のうちに叫んでいた。

「関良助はおいだ」

遠藤らと旅した間に、薩摩弁の物言いがわずかながら身についていた。それが思わぬ役に立つ

られた小柄な男が、息の根を止めにくるのを、弥一郎は薄目をあけて呆然と見ているしかない。近寄る男の後ろで、関がこちらに駆けつけようとするのを阻まれていた。身体が動かなかった。

〈何もかもこれで終わった〉

弥一郎は観念した。不思議と恐怖はなかった。

自分に関良助となって死ぬのだ。そう思うとなぜか満足だった。彼は静かに目をつぶった。そのとき、遠くで聞き覚えのある男の声が

した。

「あそこ、あそこです」

山周慶の声らしかった。懐かしい女の声が入り混じって聞こえたような気がした。すぐに喚声が聞こえ、撃剣の音が混じった。重い臉を持ち上げると、葵の紋所が幾つか目に飛び込んできた。捕り方らしい男たちの、裾をからげた素足が右に左に走るのが見えた。そのうちに、しばらく続いていた怒声と喧騒が、だんだんと聞こえなくなった。

「残念だ。二人ほど取り逃した」

向こうのほうで声がした。それでいい、その者たちが関の死を伝えるだろう、と弥一郎は薄れゆく意識の中で思った。

目の前の漆黒の闇が明けたあと、弥一郎は広大な花畑を前にして立っていた。見たこともないような極彩色の花が咲き乱れている。ついさっきまで、そこは荒涼とした大地であった。

それが、まばたきをした瞬間に、突然、花畑が目の前に現れたのである。驚きの表情を浮かべたまま、弥一郎は眼を見開いて足を踏み入れた。すると、低いと思っていた花の丈が、急に腰の高さほどになった。

両手を前に突き出して、それらを掻き分けて進もうとした。だが、一步奥に進んだときに

は、花の茎が背丈の二、三倍ほどにも成長し、身体を押しつぶそうとするかのように枝葉を寄せてくる。腕に力を込めて押し返そうとするのだ

が、力が入らない。茎を掴むと指が回らないほど太い。

弥一郎は胸が苦しくなった。呻いた。いや、そうしたつもりだったが、声が出ない。そのうちに、息が吸えなくなってきた。胸に力を入れると身体が火照り、全身に痛みが走った。弥一郎は喘いだ。喉が焼けつくように乾く。

「み……ず……」

かすれた声が他人のように聞こえた。いつし

か、花は空に向かつてまっすぐ伸びる甘蔗の姿
に変わっている。やがて、頭の上に雨雲でもか
かったような翳りが感じられたあと、口から喉
に甘いものがゆっくりと流れ落ちてきた。途端
に、それまでの胸の苦しさが、急に潮が引くよ
うに消えていった。それに合わせて意識が再び
遠のいた。

周りが墨汁を塗りたくったような暗闇になっ
たり、淡い灰色になったりを繰り返したあと、
弥一郎は、唇に温かいぬめりを感じて気がつ

に喜びが満ちてきた。愛敬のある目がくるつ
と大きく回ったかと思うと、傍らで薬湯らしい
ものを煎じている婦人に声をかけた。

「佐和さま。このひと、やっと気がつきまし
た」

大きくてよく通る声だった。それが聞こえたの
だろう。たちまち隣の部屋に喜びの声が上が
った。関の声がひとときわ高く聞こえている。

「よかった」

いた。頭の中に真綿を詰められでもしているか
のように、意識が朦朧としている。どこかで味
わったことのあるような、懐かしい甘さが口中
に広がり、弥一郎は喉仏を上下させてそれを飲
んだ。

汗が粘膜を伝い、胃の腑に流れ落ちるに従
い、四肢に生命がみなぎってくるようである。

意識が半分はつきりしてきた。薄目をあけると、
隈をつくり、真っ赤に充血した目がじつと自分
に注がれている。梅だった。瞬く間にその瞳

梅の大きな笑顔が、目の前に広がったかと思っ
と、すぐに壊れた。涙がみるみる溢れて盛り上
がるのが、弥一郎の瞳にはつきりと映ってい
た。

完

(以上3月25日放送分)